

思いやりで心を繋ぐ

稲美町立稲美中学校 3年 鳥取 佳純

四月、私は素敵な出会いをした。桜が散り始めた頃のあの日のあの時間はこれからも忘れることはないだろう。

両手に荷物を抱えてやっと座れると思った駅ホームのベンチは満席だった。歩き疲れた私だったが、少しの間なので我慢しようと思っていると、後ろからトントンと肩を叩かれた。振り返ると若い女性が何も言葉を発せず笑顔でどうぞと席を譲ってくれた。私はマスク越しに「大丈夫ですよ、ありがとうございます」と言う女性からは何も反応がなくて、私が返事をする前と変わらない。ずっと席を空けてくれているので遠慮しながらも座ろうと思った時、私は女性が補聴器をしていることに気づいた。

しばらくの間、その女性をじっと見つめて、なぜか無意識に自分の耳を触ってしまった。急いでスマホを取り出して、「私は全然大丈夫です！気にしないで座ってください！」と文字に起こし、席を立った。すると「誰かに席を譲ることはこんな私にでもできる思いやりだから！」。耳のことに気づいて私が遠慮していると思ったのだと思う。そう伝えてくれた時、女性の笑顔はどこかひきつっているように見えた。その時、私は初めて自分は間違っていたのだと気づいた。あの瞬間思ったこと、感じたことは全て差別だったからだ。何も知らないのにただ「耳の聞こえない人」と、勝手に枠に当てはめて、だから大変、かわいそう、大げさに気を遣って自分とは違う人、特別な人だと認識してしまっていた。

私は感謝の思いを何か強く伝えられないかと思い、唯一知っていた手話で「ありがとうございます」と伝えた。そうすると女性は優しい目で私を見つめて小指を二回顎に当てた。その時はわからなかったけれど、後で調べてみると「どういたしまして」という意味だった。最後に女性は「ありがとうと言ってくれてありがとう。ありがとうだけでも手話で伝えてくれると本当に嬉しい」と文で見せてくれた後に手話でも伝えてくれた。私は泣きそうになった。声に出して伝えられる以上に手話は力強く優しく、その人の思いが指、手の一つ一つの動きに込められていた。

感謝を伝えたいという思いから、とっさに出た手話が女性を嬉しい気持ちに

した。そうできたことが私は何よりも嬉しかった。そして、いつもよりも言葉がはっきりと聴こえた気がして、手話は一つの言語なんだとその時思った。今の時代、手話はドラマや映画、本などの影響で耳の聞こえない人が使うことを知っている人は多い。しかし、知っているだけで実際に使える人は少ない。私は日本語と同じ様に手話を使えるようになりたい。だって手話には人の心と心を通わせる魅力があると思うから。「ありがとう」とか「どういたしまして」とか「おはよう」とか、そんな分かりやすい言葉からでもいいから、それだけで心と心は繋がれると思う。

人はみんな得意なものも不得意なものも違って、完璧な人なんていない。それと同じ様に耳が聞こえなかったり、目が見えなかったり体が不自由だったりするのも同じだと思う。日常生活で過ごしにくいなと感じるのは、その人たちのせいではなく「障害者」の対義語だとされている「健常者」だと私たちが思い込んで壁を作ってしまったからなのではないだろうか。違うところも含めて、まずはお互いを知って理解し合うことが大切だと思う。その中でも納得できないことや、自分には分からないことも出てくる。それでも思いを伝え合って考えを共有する。そうすればきっと世界中のみんなが仲間だ。

あの女性と出会って以来、私は毎日少しずつだけ手話を覚えている。何か特別なことができなくても、口を読み取れるようにマスクを外したり、筆談をしたり、その人のことを考えることができれば何でもいいと思う。あの日、私は女性の思いやりで席を譲ってもらった。あの日、私は私の思いやりで女性に手話で感謝を伝えた。世界中の仲間みんながそんな思いやりの心を持って過ごすことができたらきっと今よりももっと優しい、笑顔で溢れる世界になると思う。そんな世界になることを私は願っている。